

ミケーネ文明におけるスポーツ

高橋 幸一 (山形大学名誉教授)

Sport in the Mycenaean civilization

TAKAHASHI Koichi
(Emeritus Professor of Yamagata University)

Abstract

It can no longer be believed that the Greeks were unique in their agonal spirit. Many scholars argue that competition is typical of ancient societies. The purpose of this paper is to examine sport in the Mycenaean civilization. However, it is necessary to clarify whether the Minoans influenced the Mycenaean sports.

Minoan civilization

The Minoans mainly practiced bull leaping and boxing. Bull leaping in particular was the most popular sport among the Minoans. The noble participants had to leap over bulls. Though it is supposed that the bull leaping is, like boxing, a kind of competitive sport, there is no certain evidence. On the other hand, the boxers wore a metal helmet protecting the head and face. The purpose of this dangerous boxing is uncertain. We cannot clearly decide whether the boxing and bull leaping are initiation ritual, or secular activity. Some scholars believe that the Minoan sport influenced the Mycenaean and Greek sports. The Mycenaean adopted only the bull sport. The helmeted boxers and bull leaping are unknown in Greek art.

Mycenaean civilization

Many archaeological evidences confirm the existence of horse-drawn chariots in the ancient Near East, but they were used in war and hunting. Although F. Starke's new interpretation of the Kikkuli Text was accepted by a few scholars, he wrongly interpreted the Text. Hittites did not enjoy chariot racing. It seems to be possibility that chariot racing was performed by the Mycenaean. However, a few archeological evidences only suggest the sport. The issues of prizes remain unsolved. It is not clear whether the Mycenaean chariot racing influenced Homer.

It is clear that sports were part of the funeral ceremony held in honor of the dead. It seems to be reasonable to suppose that the Mycenaean had funeral games with armed combat, bull leaping and possibly chariot racing. However, some scholars argue that boxing and bull leaping are not funeral game, but initiation ritual in the Aegean civilization. It is the present conditions that opinions about sports in the Mycenaean civilization are argued variously because there is no certain evidence.

はじめに

古代地中海世界において、ギリシア人はスポーツを非常に重視した民族であったとみることはできても、スポーツは古代ギリシア人だけに固有な現象であったという見解は、古代のスポーツに関するI. Weilerの研究(1974)以降修正されるようになった(Decker 2012: 9-10)。とくに1980年代以降には、古代ギリシア以外の民族のスポーツやこれらとギリシアのアゴンとの相違なども研究されるようになってきている(I. Weiler 2006: 81-110)¹⁾。筆者はすでに、クレタ島の牡牛跳び(2013a)、シュメールのスポーツ(2013b)、ヒッタイトのスポーツ(2014, 2015b)を個人的に発表してきている²⁾ので、本稿では、ミケーネ文明におけるスポーツを検討してみたい。

ホメロスの『イリアス』におけるパトロクロスの葬礼競技では8種目行われたが、古代ギリシア人と同じ印欧語族に属するヒッタイト人は、戦車競走と槍投げを除く、6種目(ボクシング、レスリング、競走、武器使用競技、重い物投げ、弓射)をすでに行っていたことが、明らかにされている(Puhvel 1988: 26-27; 高橋 2014: 1; 2015b: 1)。しかし、後者のスポーツ種目が前者に影響を与えたのかどうかを明確にすることは、非常に困難である。スポーツに関わる楔形文書や考古学的な資料は、非常に少なく、しかも不鮮明な場合も多いので、多様に解釈されているからである。古代ギリシアでも、例えば格闘スポーツ(レスリング、ボクシング、パンクラティオン)やオリンピックの「休戦」について、研究者の見解が細部まで一致しているわけではない(高橋 2015a)。当然のこととして、本稿ではこのような見解の相違をも取り上げる。

ここで使用する「スポーツ」は、ドイツ語で単数表記すればEin sportlicher Wettkampf(スポーツ競技)である(Decker 2012: 10-11; 高橋 2015b: 1)。ただし、理解しやすいように「スポーツ競技」という表記を使用している場合もある。

後期青銅器時代のミノア文明では、クレタ島を中心とする非ギリシア人であるミノア人がギリシア民族であるミケーネ人を支配していたので、最初にミノア文明のスポーツがミケーネに影響を与えたのかどうかを検討する必要がある。I. Weiler(²1988: 75-78)はこのことを意識して、古代ギリシアのスポーツを「クレタとミケーネのスポーツ」(Der kretische und mykenische Sport)から始めている。本稿で多く引用するW. Deckerも、古代ギリシアのスポーツに関する著書(Sport in der griechischen Antike)の初版(1995: 5-20)とその改訂版(2012: 14-19)、さらにアゴン(Agon)の先行形態(Vorformen)に関する論文(2004: 22-23)において、ミノア文明のクレタ島のスポーツを最初に取り上げている。本稿でも、ミノア文明におけるスポーツを最初に検討する。

I ミノア文明

1. ボクシング

W. Decker(1995: 17)によれば、クレタ島における主なスポーツ種目は、ボクシング競技(Boxkampf)と牡牛跳び競技(Stierspiel)である。クレタ島のハギア・トリアダ出土の前16世紀後半の角杯(リュトン)には、ボクシングと牡牛跳びが描かれている。以下は、このボクシングに関するW. Decker(1995: 17)の見解の概略である。

アゴ的な特徴をもっている描写は、上下4つの段階に分けられている。ボクシングでは、殴り倒す(Niederschlagen)シーンが支配的であり、勝者は相手を左フック(Haken)で地面に叩きのめしている。一方、敗者は地面に膝をついてうずくまったり、尻もちをついて引っくり返ったりしている。接近戦やウォーミングアップをしているボクサーも描かれている。このリュトンの競技者はすべて腰布を着けている。あご紐のついたヘルメットをつけた競技者は成人で強烈な打撃をしているが、髪をカールした青年競技者は、ヘルメットをつけていないので、厳しい成人クラス

には出場できなかったと思われる。以上が、ボクシングに関するW. Decker (1995: 17) の見解の概略である。さらにW. Deckerは改訂版 (2012: 15) でも、同じ見解を表明している。

N.B. Crowther (2007: 37) によれば、それらのボクシングは、日常的な競技、軍事訓練、奴隷やプロによるスペクテイタースポーツ、あるいは何らかの儀礼であることが推測される。J. Rutter (2014: 41) は、このボクシングは貴族の青年男子による入会儀礼 (initiation ritual) であると解釈している。

一方、スポーツ史で非常に有名なボクシングシーンは、サントリーニ島出土の前2000年紀中期の壁画にみられる少年ボクシングである。以下は、このボクシング格闘に関するW. Decker (1995: 17-18) の見解の概略である。

長い髪をカールしているが、部分的に髪を刈り込んでいる2人の子供が、ボクシングをしている。2人とも右手のこぶしにグローブをつけているだけである。左の少年は、右の少年の攻撃を軽くかわして、グローブをつけない手で反撃している。しかもその少年は、イヤリング、ネックレス、ブレスレット、アンクレットを身につけており、明らかに相手より身分が上である。以上が、W. Decker (1995: 17-18) の見解の概略である。さらにW. Deckerは、改訂版 (2012: 15-16) でも同じ見解を表明している。

N.B. Crowther (2007: 38-39) は、このような解釈は「推測」であるとしているが、W. Deckerの見解は他の研究者と同じであり (Rutter 2014: 40-41)、定説になっているように思われる。ただし、J. Rutter (2014: 44) が主張しているように、ヘルメットをつけたボクシングやアクセサリーをつけた少年ボクシングは、宮殿崩壊後のミケーネにはまったく影響を与えなかった。

2. 牡牛跳び競技

後期青銅器時代のクレタ島では、牡牛跳び (bull leaping, Stierspringen) のシーンがフレスコ画、印章、印影、指輪、宝石、ブロンズ像に

表現されていた。1人の青年が牡牛の背中の上方を優雅に跳んでいるポーズはほとんどの資料に共通している。しかし、考古学的な資料だけに依存せざるを得ない (Kyle 2007: 42-43) ために、跳び方、開催地、参加者の性別や身分、儀礼との関連などの事柄についても、多様に解釈されてきている。以下は、牡牛の跳び方を表現した54の考古学的な資料を詳細に研究したJ.G. Younger (1976: 125-137) の跳び方に関する見解の概略である。

牡牛の跳び方は、次の3つに分類することが可能である。

1. A. Evansの跳び方

- 1) 男子の跳躍者は、突進して来る牡牛の正面に接近して、牡牛の両方の角を両手で掴む。
- 2) 牡牛が頭を真上に突き上げるのを利用して、空中に跳び上がりながら前方宙返りを行う。
- 3) 両足で牡牛の背中に下りる。
- 4) 牡牛の背中から両足で跳び下りて着地する。

この跳び方は、危険過ぎて実際には不可能なので、芸術的な理想像であろう。

2. 前方転回跳び (ハンドスプリング、跳躍者がダイビングするような跳び方 [Diving Leaper Schema])

このようなシーンは最も多く例証されている。

- 1) 男子の跳躍者は、高い跳躍台から牡牛の頭の上方向へ跳び込む、あるいはアシスタントによって頭を低くさせられた牡牛の頭の上方向へ跳び込む。
- 2) 牡牛の両肩付近で両手を突き出して前方転回跳びを行う。
- 3) 牡牛の背後に両足で着地する。

この跳び方は、角で突き刺される危険が少なく、牡牛が突進してきても可能である。

3. 横跳び越し (跳躍者が空中で浮遊しているような跳び方 [Floating Leaper Schema])

- 1) 牡牛の横側に接近する。

2) 片手で牡牛の角を掴んだり、別の片手で首を支えに利用したりして、全身を水平に伸ばしながら牡牛の反対側に飛び越える。柵を横に飛び越える場合と似ている。

3の横跳び越しは実際に行われていたものではない。以上が、J. G. Younger (1976: 125-137)の見解の概略である。その後、彼は1983年の論文で、横跳び越しは最も難しい前方転回跳びを練習する前段階として、支えを利用して実際に練習されたものであると修正し(1983: 72-80)、1995年の論文では、独立した跳び方であったことを認めている(1995: 507-545)。以下は、彼の1995年の論文の概略である。

A. Evansが主張する芸術的な表現は、後期青銅器時代の初期(前16世紀)にみられるだけで、LMIB³⁾(前1425年)以降にはまったく発見されていない。一方、「前方転回跳び」は、LM IB/LH II A(前1480年-前1425年/前1500年-前1450年)から、クレタ島ではLM III A(前1390年-前1340年)まで、ミケーネではLM III B(前1340年-前1190年)までみられる。角を支えにしての「横跳び越し」(bull-vaulting)は、LMI(前1600年-前1425年)からIII B(前1340年-前1190年)まで継続的にみられるので、独立した跳び方としても行われていたはずである。主に男子によって跳ばれたのであろうが、ティリンスのフレスコ画には白色の青年女子の跳躍者が描かれている。以上が、J. G. Younger (1995: 507-545)の論文の概略である。

A. Evansの跳び方は、他の研究者によっても不可能であると考えられている(Decker 1995: 18-19; Panagiotopoulos 2006: 129; McInerney 2011: 8-9; Decker 2012: 14-19)。跳び方は「前方転回跳び」「横跳び越し」であったと思われる。開催地に関しては、宮殿の中央広場(Thompson 1986: 5-13; 1989: 62-69; Castleden 1990: 146; McInerney 2011: 8; Decker 2012: 17)と宮殿の外に設置された場所(Younger 1995: 511-514; Panagiotopoulos 2006: 130-131; Kyle 2007: 43)

との見解が対立している。参加者の性別についても、クレタの芸術では男子は常に赤色で女子は白色で表現されたので、青年の男子も女子も参加したと主張する見解がある(Younger 1995: 515-516; Crowther 2007: 35-36; Kyle 2007: 41)。ただし、男子と同様に、女子も跳んだという見解(Scanlon 1999: 33-70; 2014b: 28-59)と危険なので男子だけだったという見解(Decker 1995: 18; 2012: 16)が対立している。D. Panagiotopoulos (2006: 128-129)によれば、跳んだのは男子だけであり、赤色は経験豊富な跳躍者や貴族の跳躍者を、白色は未熟なアシスタントや召使を示している。牡牛跳びの目的については、入会儀礼だったという見解が多い(Younger 1995: 521; Scanlon 1999: 33-70; Panagiotopoulos 2006: 126-128, 131-132; Kyle 2007: 42-43; Crowther 2007: 36; Rutter 2014: 41)。しかし、その儀礼が発展してプロのアクロバットによるスペクテイタースポーツ(spectator sport)になったという見解もある(McInerney 2011: 11-12; Olivová 1984: 73)。

牡牛跳びは競技スポーツ(competitive sport)だったのであろうか。W. Deckerによれば、ハギア・トリアダの角杯(リュトン)に、ボクシング競技との関連で牡牛跳びが描写されているのみをみるだけで、スポーツ的であること(Sportlichkeit)、すなわち競技的であることは確実であろう(Decker 1995: 18)。また、T.F. Scanlon (1999: 33-70)によれば、牡牛跳びは、このリュトンの証拠だけでなく、タナグラ出土のミケーネの粘土製棺(ラルナクス)にも、葬礼競技における牡牛跳びと武器を使用した競技が一緒に描写されているので、明らかにスポーツ競技だった。

以下は、この競技の評価法に関するD. Panagiotopoulos (2006: 130)の見解の概略である。

牡牛跳びは、勇気を証明するためにただ跳びさえすればよかつたのではなく、跳び方の優雅さ、巧みさ、完成度が重視されていたと思われる。このように、牡牛との競技(Spiel mit dem Stier)が実際に高度な美的特徴をもつ運動だったため

に、牡牛跳びのシーンも高度な芸術形態へと洗練されたのであろう。ただし、N.B. Crowther

(2007: 36)も指摘しているように、クレタ人が牡牛跳びにおける運動の質である美しさ、難易度、熟練度をどのように評価していたのかを証明する資料は、皆無である。以上が、D. Panagiopoulos (2006: 130)の見解の概略である。

このように、資料の多い牡牛跳びも多様に解釈されてきている。これに対して、W. Decker (1995: 18-20)の見解の概略は以下のとおりである。

この危険な儀礼的競技に女子は参加していない。体操競技用の動かない跳馬を前方転回跳びするのは可能でも、どこへ突進してくるか分からない牡牛では不可能である。牡牛が攻撃するように挑発し、突進した瞬間に跳躍者はある場所から高く跳び上がったので、牡牛は彼を傷つけないで走り抜けるだけだった。牡牛の側面からの横跳び越しも可能だったであろう。あるいは、参加者が安全に跳び越すことができるまで、捕獲者が角を掴んで牡牛を押し下げていた可能性も考えられる。ボクシング格闘と関連して牡牛跳びが現れるので、そのスポーツ性 (Sportlichkeit)、すなわち「競技であること」は明らかである。以上が、牡牛跳びに関するW. Decker (1995: 18-20)の見解の概略である。

このように、W. Deckerは、前方転回跳びを否定し、男子だけが、もっと安全な跳び方をして競技していたと主張している。

さらに、W. Decker (2004: 15)によれば、いかなる参加者に対しても、勝利の機会を平等に与えるのがギリシアのアゴンの特徴であったが、牡牛跳び競技もそのようなアゴンの先行形態だった。以下は、W. Decker (2004: 20-21)の見解の概略である。クレタ島における牡牛跳びや1997年に中央アナトリアのシングルルで発掘された前17世紀の古代ヒッタイトの壺に描写された牡牛跳びは、アゴンの先行形態である。牡牛跳びがスポーツ色の強い儀礼 (ein sportlich gefärbtes Ritual)、すなわち競技として行われる儀礼であった

ことは、確実である。このようなW. Deckerの見解は、改訂版 (2012: 16-18)でも同じである。

資料が多い牡牛跳びも多様に解釈されてはいるが、W. Deckerの見解が一般的であるように思われる。しかし、T.F. Scanlon (2014b: 29-59)によれば、牡牛跳び競技では、女子は男子が跳ぶための補助的な役割を果たしていたと主張されるが、実際には女子も、男子と同様に競技に参加して、牡牛を跳んでいたのである。また、ボクシングや牡牛跳びは儀礼的か、あるいは世俗的かと二者択一的に問われるが、古代世界では混在している場合が多い。

Mouratidis (1989: 62)やScanlon (2014b:29)によれば、ミノア文明とミケーネ文明のスポーツには類似点も多いが、前者が後者に影響を与えたという直接的な証拠は少ない。

ただし、クレタ島で盛んに行われていた牡牛跳び競技は、「II」で検討するように、ギリシア人であるミケーネ人の粘土製棺 (ラルナクス) に描かれている。

また、このような牡牛跳びは早くも、中央アナトリアにおけるシングルルの前17世紀の壺にも描かれている (Collins 2010: 64-66; Dijk, R. van 2013: 144-162; 高橋 2015b: 5) が、それとクレタ島との関係は不明である。

II ミケーネ文明

W. Decker (1995: 21)によれば、ミケーネ芸術におけるスポーツ種目は主に競走 (Wettlauf)、ボクシング競技 (Boxkampf)、戦車競走 (Wagenrennen) に限定することができるが、これらにさらに、テーバイに近いタナグラ出土のラルナクス (larnax)、すなわち死者を納める粘土製棺 (Tonsarkophag) に描かれた死者の名誉を称えるアゴン (Totenagon) が加えられる。

1. 競走

以下は、競走に関するW. Decker (1995: 21-22)の見解の概略である。キプロス島で出土した前13世紀のミケーネ製の壺には、2人の走者が描

かされている。彼らが競走していることは、ボクシング競技者と対応していることから確実である。いくつかのミケーネの容器に描かれた競走は、軍事訓練と関連していたように思われる。ホメロスでも、最強の戦士であるアキレウスを特徴づける「足の速い」(podas okys) は、走力が戦争で高く評価されていたことを証明している。以上が、競走に関するW. Decker (1995: 21-22) の見解の概略である。さらにW. Deckerは、改訂版 (2012: 20) でも同じ見解を表明している。

ところで、古代シュメールにおけるシュルギ王 (在位：前2094年頃-前2047年頃) は、激しい雷雨の中を1日で往復320kmを走破したと語られている (Rollinger 1994: 46-53; Lamont 1995: 207-215; 高橋 2013b: 4) が、これは儀礼走 (Kultlauf) だった可能性もあるだろう (Rollinger 1994: 57-59; 高橋 2013b: 4)。また、イシュタル女神、ナブー神、ニヌルタ神、さらにはバビロニアの最高神であるベル・マルドゥクも、速い走力 (Schnellauf) を称えられている (Rollinger 1994: 31-33; 高橋 2013b: 4)。一方、楔形文書を解読してヒッタイトのスポーツを研究したJ. Puhvel (1988: 27; 高橋 2014: 1-2) によれば、ヒッタイトの国王が首都ハットゥシャで主催する春祭、すなわちアン・タフ・シム祭 (ANTAH. SUM-Fest) では、国王の護衛兵による競走が行われており、勝利した兵士には王のロバの手綱をもつ名誉ある地位が与えられた。

このように古代ギリシア以前の競走や走力も明らかにされている。しかし、これらのスポーツ活動がミケーネやホメロスに直接的に影響を与えたとは、主張されてはいない。確実な証拠がないからである。

2. ボクシング競技

キプロス島で発掘された前13世紀のミケーネ製の壺には、ロープで結ばれた1組のボクシングがみられる。以下は、このボクシングに関するW. Decker (1995: 22) の見解の概略である。足の速さと同様に、戦争で役に立つ格闘スポーツ種

目 (Kampfsportart) であるボクシングは、ミノアのクレタ島と同様に、ミケーネ時代にも高く評価されていた。一例で、2人の競技者の腰は短い紐で結ばれている。その目的は、接近戦を強制することによって、攻撃力が強いうちに決着をつけさせることだったに違いない。競技者は手の平を開いているのでレスラーと解釈されたりもするが、レスラーの場合には、お互いに上体を軽く前傾しながら組み合っている。ここの2人は、まっすぐに立って、お互いに触れ合ってもいないので、明らかにボクサーである。両者の間に賞品の大きな大釜が置かれている場合もある。以上が、ボクシングに関するW. Decker (1995: 22) の見解の概略であるが、改訂版 (2012: 20) でも同じ見解を表明している。

このような工夫は後のギリシアでも行われていたが、ここのロープが影響を与えたという見解はみられない。一方、ミケーネのボクサーは、ミノア文明のように入会儀礼を行っているのではなく、貴族の酒宴のさいにショースポーツとして雇われた者であるという解釈もある (Rutter 2014: 45)。

古代ギリシア以前の格闘スポーツに関しては、ギリシアを基準として、レスリングとボクシングとに明確に区別することが困難な場合も多い。以下は、古代シュメールにおける格闘スポーツに関するR. Rollinger (1994: 13, 33-36; 高橋 2013b: 2-3参照) の見解の概略である。

スポーツ競技 (sportliche Wettkämpfe) と深く関わっているシュメール語であるgešbáを「レスリング競技」(Ringkampf) と表記する。このgešbáは、「ボクシング競技」(Faustkampf) 自体を意味することはないが、こぶしで打つことも含んでいたと思われる。古代ギリシアのパンクラティオンのように、「ボクシングも含むレスリング競技」とも表記できるであろう。ウル第3王朝において、ボクシング競技とレスリング競技との区別は流動的であったと思われる。Ch. Ulf (1988: 24) によれば、ボクシング競技やレスリング競技は自然民族の場合、近代ヨーロッパにお

けるように明確に区別されていたわけではなかった。

以上が、R. Rollinger (1994: 13,33-36; 高橋 2013b: 2-3参照) の見解の概略である。このような R. Rollinger や Ch. Ulf の指摘を理解すれば、時代的に早期の民族における「競走」「ボクシング」「レスリング」とみなされる種目が、確実な証拠を示すことができないのに、後のミケーネやホメロスの「当該種目」に影響を与えた、と軽々しく断定する誤りを犯さなくなるであろう。

3. 戦車競走

ホメロスの『イリアス』におけるパトロクロスの葬礼競技では、戦車競走が盛大に行われているが、このような戦車競走が最初にどこで行われるようになったのかについて、まだ定説は確立されていない。

楔形文書を解読して、ギリシア人と同じ印欧語族であるヒッタイト人のスポーツを研究した J. Puhvel (1988: 26-27) によれば、ヒッタイトにおいて戦車と槍は戦争で非常に重要であり、しかも、戦車用の馬をトレーニングする指導書である「キックリ・テキスト」(Kikkuli Text) が前15世紀から今日まで保存されているにもかかわらず、戦車競走と槍投げ競技の証拠は、これまでヒッタイトでは発見されていない。

一方、F. Starke (1995) は、「キックリ・テキスト」の目的は、それまで支持されてきたような馬の持久力の強化ではなく、馬が戦車を巧みに方向転換させることができるように訓練することであると新たに解釈した。このことから、ヒッタイトでは巧みな手綱さばきを必要とする戦車競走が行われていたと推測されるようにもなったが、その競走の確実な証拠を示すことはできなかった。筆者 (高橋 1999, 2003: 252-266) も F. Starke の著書や W. Decker (1996: 246-252) の好意的な書評を紹介したことがある。しかしその後は、F. Starke の解釈を批判して、彼の著書以前のように、巧みな方向転換ではなく、戦車用の馬の持久力を強化するテキストであると主張する論

文が多くなっている (Raulwing 2004: 1-21; 高橋 2015b: 6-8)。このように、ヒッタイトにおける戦車競走の証拠は、依然として提出されていない。

しかし、ミケーネ時代には戦車競走が行われていた可能性がある。以下は、戦車競走に関する W. Decker (2012: 20-21) の見解の概略である。

ミケーネ時代に戦車競走が行われていたということは、J. Wiesner (1968: 98-99) によってすでに1968年に証明されていたことである。ネメアに近いアイドニアのミケーネの墓で発見された前1500年頃のゴールドの印章指輪には、1人の御者に導かれた2頭立て戦車が描かれている。しかもそこでは、戦争との関連がまったくみられない。御者は短い棒、すなわちケントロン (kentron) をもって、疾走する戦車の馬を巧みに操縦している。この戦車の描写は、後のギリシアで市民を狂喜させた戦車競走を初めて示したものである。一方、K. Kilian (1980: 21-31) は、ティリンス出土の後期ミケーネのアンフォラの断片にある2頭立て戦車の描写 (図1) を、戦車競走であると解釈している。S. Laser (1987: 30) も K. Kilian の解釈を支持している。J.H. Crowel (1981: Katalog V 13 (Tf. 52) und V 48 (Tf.64)) によれば、われわれの今日の知識状況からみて、ミケーネの他のいくつかの陶片図像とともに、前2000年紀に戦車を初めて競走に利用したのはギリシア人であるとみることができる。非常に速く走る馬の戦車 (Pferdewagen) は、古代オリエントや古代エジプトで王侯貴族の乗り物だったので、もっと早期の戦車競走の証拠が発見されても驚くべきことではないだろう。ただし、前15世紀から伝えられてきたヒッタイト人のキックリ・テキストは、戦車馬の持久力の強化に関わるものであり、戦車競走とは無関係であるように思われる。以上が、戦車競走に関する W. Decker (2012: 20-21) の見解の概略である。彼はこの見解を初版 (1995: 23) から改定版 (2012: 20-21) まで一貫して表明している。S. Laser (1987: 30) によれば、考古学的な資料から、ミケーネ文明で戦車競走が行われていたことは、ほとんど疑問の余地

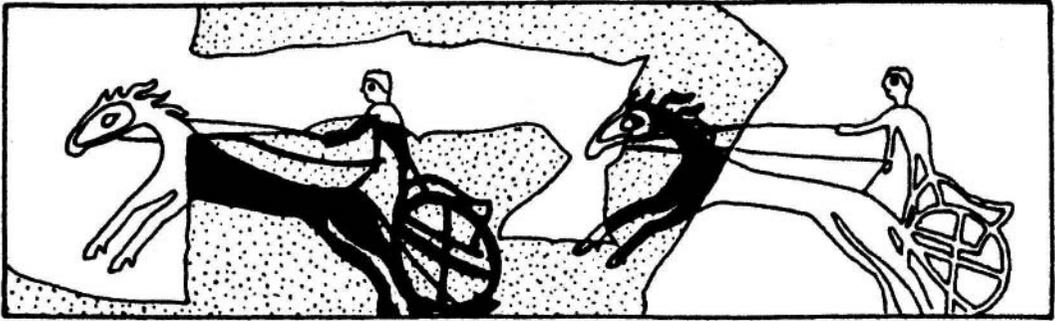


図1 戦車競走？ 素描的に補足した図
ティリンス出土のアンフォラ 前13世紀 (Decker 2012: 164)

がない。M. Golden (2004: 35) はミケーネの戦車競走を支持している。D.G. Kyle (2007: 49) も、ティリンス出土の前13世紀のアンフォラに描かれた戦車は競走しているという上記のK. Kilianの見解を支持している。T.P.J. Perry (2014: 54) によれば、戦車競走の条件は武装していない御者が1人で乗っていること、賞品としての三脚釜が置かれていることである。ミケーネの戦車の描写には三脚釜が欠けているが、戦争や葬儀の行列を暗示していないので、戦車競走と解釈されているのであろう。

S.G. Miller (2004: 21-22) によれば、ティリンスの戦車の描写(図1)は、修復されたので競走しているようにみえるが、これとは別に修復することも可能である。したがって、ミケーネ世界における戦車競走には、反論できないような証拠があるわけではない。またN.B. Crowther (2007: 40) によれば、ティリンス出土の前13世紀のミケーネのアンフォラには戦車が示されているが、修復箇所が大き過ぎるので、それらが戦車競走であると確実に言うことは不可能である。

このように、戦車競走がすでにミケーネ文明で行われていた可能性はあるが、そのことを示す確実な証拠はないのである。

4. 葬礼競技

ホメロスの『イリアス』ではパトロクロスの葬礼競技 (Leichenspiel) が行われているが、W.

Deckerは、その競技はすでにミケーネ時代に行われていたと主張している。彼は初版 (1995: 24-25) で表明した見解を改訂版 (2012: 21-22) で補強しているので、ここでは後者の概略を取り上げる。

ミケーネにおける最も重要なスポーツ競技は、タナグラ出土の前13世紀前半の彩色されたラルナクス (larnax)、すなわち死者を入れる粘土製の棺 (Tonsarkophag) に描写されている (テーバイの考古学博物館所蔵)。その棺は、埋葬式典 (Begräbnisfeierlichkeiten) とみられるシーンですべて満たされている。この棺の2つの長い側面を仮にA、Bと表記する⁴⁾。AとBの上段と下段には、異なる絵が描かれている。Aの上段では13人の女性が両手を上げて嘆き悲しんでいる (死者儀礼)、Bの上段では、ヤギの群れの中で2頭だけが向かい合って大きく描かれている。男性がその1頭の咽を剣で突き刺そうとしている (動物犠牲)。AとBの下段には、ホメロスのパトロクロスの葬礼競技に相当するスポーツ競技が描かれている。Aの下段の中央では、1組の競技者が武装しないで剣を交差させて戦っている (武器をもった競技)。彼らの両側では、2頭立て戦車が向かい合っている。戦車のバスケットにはそれぞれ3人の人物が立っている。4本のスポーク状車輪はリムとハブの面で強化されている。戦車は前2000年紀の地中海世界における上流階級のステータスシンボルだった。このラルナクスの戦車の配置や

3人乗っていることは、戦車競走よりも、むしろ葬礼における儀式的な行進を示しているのであろう。Bの下段には、牡牛跳び競技が登場する。1人の男性が、向かい合った2頭の牡牛の間に立って長い角を掴んでいる。2人のアクロバットは牡牛の背中に片手をつけて横向き跳び越し (Flanke) を行っている。他の1人は片手を背中に着いているだけでなく、角を掴んでもいる。これらのシーンからは、パトロクロスの葬礼を直接的に連想することができる。そこでは、悲しみの身振り (Trauergesten) と動物犠牲 (Tieropfer) の後に、葬礼競技 (Leichenspiel) が行われている。すでにミケーネ時代にも、一般的な死者儀礼 (Totenritual) だけでなく、死者の名誉を称える葬礼競技が行われていたのである。ただし、牡牛跳び競技だけは、ホメロスの知らない競技だった。以上が、ミケーネの葬礼競技に関する W. Decker (2012: 21-22) の見解の概略である。

さらに、W. Decker (2004: 23-25) によれば、ホメロスだけでなく、その後の4つの全ギリシア的な祭典競技の起源は葬礼競技と関連づけられているので、ギリシアのアゴンは、ミケーネ時代のラルナクスにみられる、死者を称えて行われる競技を直接的に継承発展させたものである。W. Decker (1982/ 83: 1-24) はスポーツ史において初めて、葬礼競技はミケーネ時代に行われていたという見解をすでに1982/ 1983年に発表しており、改訂版 (2012:21 -22) でも彼の見解は同じである。

上記から明らかなように、W. Deckerは、武器をもつての競技と牡牛跳び競技とを葬礼競技の直接的な証拠とみなしていることになる。ただし、すでにミケーネ時代に4本のスポーク状戦車の競走が行われていたと思われるので、ラルナクスにそのような戦車が描かれていること自体を、間接的な証拠とみなしている可能性もあるだろう。

W. Deckerの見解を支持するJ. Mouratidis (1989: 59; 1990: 11) によれば、ミケーネで発見された前1600年頃の3つの墓石には、戦車が描かれているが、それらには、狩猟や戦争と違って武

装していない1人の御者しか乗っていないので、明らかに葬礼のさいに行われた戦車競走である。M. Golden (2004: 106) によれば、武装しないで剣を使用する競技は、最初にミケーネ人によって採用され、後にはローマ人によって、剣闘士 (gladiator) の決闘として発展させられた。ただし、ミケーネの競技者はホメロスと異なって全裸である。D.G. Kyle (2007: 50) は、タナグラ出土のラルナクスについて、賞品は確認されないが、葬礼競技であると主張している。N.B. Crowther (2007: 40) によれば、戦車、武器をもつての競技、牡牛跳びは、スポーツ、おそらくは身体的な誇示を葬礼と関連させているように思われる。T.F. Scanlon (2014b: 29) は、武器競技と葬礼競技を初めて行ったのはミケーネ人である、と主張している。

一方、C. Renfrew (1988: 15) によれば、戦車の描写は葬礼における競走であろうという見解は、ホメロスの葬礼競技を関連させればあり得るが、これ以上納得できるように立証することは不可能である。さらに、J. Rutterは、ラルナクスの描写は葬礼競技として理解することができるというW. Deckerの見解に反論するM. Benzi (1999: 215 -217) を強く支持している。以下は、ミケーネの葬礼競技を否定するJ. Rutter (2014: 46) の見解の概略である。

W. Deckerが武器による競技 (armed duel) とみなした2人の男性を、M. Benzi (1999: 219-222) はボクシングと解釈している。このようなボクシング競技や牡牛跳び競技が、エーゲ海の青銅器時代にとくに葬礼と関連していたという証拠はない。したがって、このラルナクスのスポーツ活動と葬礼を関連させる根拠はない。その後の鉄器時代においては、葬礼競技と戦車競走は関連しているが、ラルナクスで複数の人物を乗せて向き合っている2台の戦車を競走であると解釈することは不可能である。このラルナクスの牡牛跳び競技とボクシング競技は、その中に葬られた青年の入会儀礼であろう。以上が、J. Rutter (2014: 46) の見解の概略である。

このように、W. Deckerは「武器を使用した競技と牡牛跳び競技」を「葬礼競技」、一方、J. Rutterは「ボクシングと牡牛跳び競技」を「入会儀礼」という見解を主張している。しかし、ただ一つしかないラルナクスの不鮮明な描写を根拠として、両者のような見解を表明することは不可能であるように思われる。

このラルナクスには非ギリシア人であるクレタ人が盛んに行っていた牡牛跳び競技が描写されている。W. Decker (1995:10; 2004: 24; 2012: 17)の見解によれば、牡牛跳び競技はギリシア人には見知らぬものであり、エーゲ文明独自のスポーツ形態であったように思われる。また、ホメロスのパトロクロスの葬礼競技と比較すると、異なるものは牡牛跳びだけである。

さらに、J. Rutter (2014: 43-44)によれば、ミケーネの牡牛跳びの描写はクノッソスのものと非常に類似しているため、このテーマは、ミケーネ人がクノッソスを支配した後すぐに、フレスコ画芸術の形でクノッソスからミケーネにもたらされたものであろう。

このように、非ギリシア人のクレタ島における牡牛跳び競技がギリシア人であるミケーネのラルナクスに影響を与えたことは明確に指摘されている。しかし、そこに描かれた牡牛跳び競技は、ミケーネでは開催されないでただ描かれただけなのか、あるいは、ミケーネ人かクレタ人が実際に行ったのかについては、ほとんど言及されていない。S. Scanlon (2014b: 31)によれば、ラルナクスには、葬礼競技との関連で牡牛跳び競技と武器競技と一緒に描写されている。ミケーネ人は真の競技 (true competition) である牡牛跳びを葬礼競技に適応させたのである。このように、S. Scanlonは、ミケーネ人が牡牛跳び競技を行った、と示唆しているように思われる。ただし、そのための確実な証拠はない。

おわりに

本稿においては、ミケーネ文明とそれ以前のミノア文明におけるスポーツを検討した。

クレタ島における主なスポーツ種目は、ボクシングと牡牛跳びである。ヘルメットをつけた危険なボクシングや高価なアクセサリをつけた少年ボクシングは、ミケーネではまったく発見されていない。一方、牡牛跳びの考古学的な証拠は非常に多いにもかかわらず、その目的、跳び方、男女の参加、場所については多様に解釈されている。競技だったという見解が多いにもかかわらず、その勝敗の決定法に関する証拠は、皆無である。牡牛跳び競技は、ミケーネ人の粘土製棺 (ラルナクス) にも描かれているが、彼らが行ったかどうかは、不明である。

一方、ミケーネ芸術におけるスポーツ種目は主に競走、ボクシング、戦車競走に限定することができる。さらに、タナグラ出土のラルナクスに描かれた死者の名譽を称えるアゴン (Totenagon) が加えられる。

競走は、クレタ島やミケーネ以外にも、シュメール、印欧語族であるヒッタイトでも行われていたことが、明らかにされている。しかし、それらの関係は不明である。「競走」と解釈できるスポーツが、時代的に先行しているだけで、その後の他民族の「競走」に影響を与えたと主張するのは、単なる推測だけである。多くの研究者が同意する説得力のある根拠を示さなければならない。ミケーネのボクサーは接近戦を行うためにロープで結ばれていたが、後のギリシアでは「はしご」が利用された。しかし、両者の関係は不明である。古代ギリシア以前や自然民族の格闘スポーツに関しては、ギリシアを基準にして、レスリングとボクシングとに明確に区別することが困難な場合も多い。

ヒッタイトでは、戦車用の馬をトレーニングする前15世紀からの「キックリ・テキスト」が保存されているにもかかわらず、戦車競走の証拠はまったく発見されていない。一方、ミケーネ時代に2頭立て戦車競走が行われていたということは、定説になっているように思われるが、大きく修復された資料に基づいているために、異論も主張されている。また、このような戦車競走がホメ

ロスに影響を与えたと確定できる証拠もない。

W. Deckerによれば、ホメロスによって詳述されているパトロクロスの葬礼競技と同じ競技がすでにミケーネ文明でも行われていた。W. Deckerは、「武器をもつての競技」と「牡牛跳び競技」とを葬礼競技の直接的な証拠とみなしている。彼の見解は、研究者によって支持されている場合が多い。しかし、武器競技をボクシングと解釈して、このボクシングと牡牛跳び競技は、葬礼とは無関係で、葬られた青年の入会儀礼であったと主張する見解もある。ただ一つしかないラルナクスの不鮮明な描写を根拠として、説得力のある見解を表明することは不可能であるように思われる。

このように、クレタやミケーネにおけるスポーツは、考古学的な資料が存在していても、非常に多様に解釈されているのが現状である。

注

- 1) 古代ギリシア以前のスポーツの研究動向については、W. Decker (2004: 9-25) や T.F. Scanon (2009: 149-160) からその概略を知ることができる。
- 2) 高橋 (2013a, 2013b, 2014, 2015b) は古代地中海世界におけるスポーツの研究動向を個人的に発表してきているが、正式には未公開である。なお、上記の研究動向についてすでに公刊された高橋の論文等は、以下のとおりである。ギリシア (1992)、ローマ (1993)、自然民族 (1997)、古代世界 (1998)、キックリ・テキスト (1999)、古代ギリシア・ローマ (2003)、オリンピックの起源 (2008)、女性とスポーツ (2011)、ギリシアの格闘スポーツ (2015a)。なお、Krüger, M. & Langenfeld, H. (Hrsg.) (2010) は、古代ギリシア以前をほとんど論じていない。
- 3) ローマ数字は考古学的な土器の変遷に基づいた編年である。
- 4) 筆者は、長方形の2側面に描かれた絵を理解しやすいように、AとBに区別して説明したが、W. Deckerはそのような区別をしていない。

引用・参考文献

- Benzi, M. (1999) Riti di passaggio sulla larnax Dalla Tomba 22 di Tanagra. in: V. La Rosa, D. Palermo, and L. Vagnetti, eds. (1999) *Epi Ponton Plazomenoi: Simposio italiano di studi egei dedicato a Luigi Bernabó Brea e Giovanni Pugliese Carratelli*. Rome.
- Castleden, R. (1990) *Minoans*. Routledge: London and New York.
- Christesen, P. and Kyle, D.G. (2014) *A companion to sport and spectacle in Greek and Roman antiquity*. West Sussex.
- Collins, B.J. (2010) Hero, field master, king: Animal mastery in Hittite art and texts. in: D.B. Counts and B. Arnold (ed.), *The master of animals in old world iconography*. Budapest: 64-66.
- Crouwel, J.H. (1981) *Chariots and other means of land transport in Mycenaean Greek* (Allard Pierson Series 3). Amsterdam.
- Crowther, N.B. (2007) *Sport in ancient times*. Oklahoma.
- Decker, W. (1982/ 83) Die mykenische Herkunft des griechischen Totenagons. in: *Stadion* 8/9 : 1-24.
- Decker, W. (1995) *Sport in der griechischen Antike. Vom minoischen Wettkampf bis zu den Olympischen Spielen*. München.
- Decker, W. (1996) Review of Starke 1995. *Nikephoros* 9: 246-252.
- Decker, W. (2004) Vorformen griechischer Agone in der Alten Welt. *Nikephoros* 17: 9-25.
- Decker, W. (2012) *Sport in der griechischen Antike. Vom minoischen Wettkampf bis zu den Olympischen Spielen*. 2., völlig

- überarbeitete und aktualisierte Auflage. Hildesheim.
- Dijk, R.van (2013) Bull-leaping in the ancient Near East. *Journal for Semitics* 22 (1): 144-162 (academia. Edu).
- Evans, A. (1921) On a Minoan bronze group of a galloping bull and acrobatic figure from Crete. *JHS* 41: 247-259.
- Golden, M. (2004) *Sport in the ancient world from A to Z*. London and New York.
- Kilian, K. (1980) Zur Darstellung eines Wagenrennen aus spätmykenischer Zeit. in: *AM* 95: 21-31.
- Krüger, M. & Langenfeld, H. (Hrsg.) (2010) *Handbuch Sportgeschichte*. Schorndorf.
- Kyle, D.G. (2007) *Sport and spectacle in the ancient world*. Malden.
- Lamont, D.A. (1995) Running phenomena in ancient Sumer. *JSH* 22 (3): 207-215.
- Laser, S. (1987) *Sport und Spiel*. (Archaeologia Homerica T), Göttingen.
- McInerney, J. (2011) Bulls and bull-leaping in the Minoan world. *Expedition* 53 (3): 6-13.
- Miller, S.G. (2004) *Ancient Greek athletics*. New Haven and London
- Mouratidis, J. (1989) Are there Minoan influences on Mycenaean sports, games and dances? *Nikephoros* 2: 43-63.
- Mouratidis, J. (1990) A nachronism in the Homeric games and sports. *Nikephoros* 3:11-22.
- Olivová V. (1984) *Sports and games in the ancient world*. Trans. D. Orpington. New York. 阿部生雄, 高橋幸一共訳, 岸野雄三監修 (1986) *古代のスポーツとゲーム*. 東京.
- Panagiotopoulos, D. (2006) Das minoische Stierspringen: Zur Performanz und Darstellung eines altägäischen Rituals. in: J. Mylonopoulos und H. Roeder (Hrsg.), *Archäologie und Ritual. Auf der Suche nach der rituellen Handlung in den antiken Kulturen Ägyptens und Griechenlands*. Wien: 125-138.
- Perry, T.P.J. (2014) Sport in the early iron age and Homeric epic. in: P. Christesen and D.G. Kyle. (53-67).
- Puhvel, J. (1988) Hittite athletics as prefigurations of ancient Greek games. in: W.J. Raschke (26-31).
- Raschke, W.J. (Hg.) (1988) *The archaeology of the Olympics: The Olympics and other festivals in antiquity*. Wisconsin.
- Raulwing, P./ Meyer, H. (2004) *Der Kikkuli-Text. Hippologische und methodenkritische Überlegungen zum Training von Streitwagenpferden im Alten Orient*. in: S. Burmeister e.a. (Red.), *Rad und Wagen. Der Ursprung einer Innovation. Wagen im Vorderen Orient und Europa*. Oldenburg/Mainz (Archäologische Mitteilungen aus Nordwestdeutschland, Beiheft 40): 491-506.
- Renfrew, C. (1988) The Minoan-Mycenaean origins of the Panhellenic games. in: W.J. Raschke (13-25).
- Rollinger, R. (1994) Aspekte des Sports im Alten Sumer. *Sportliche Betätigung und Herrschaftsideologie im Wechselspiel*. *Nikephoros* 7: 7-64.
- Rutter, J. (2014) Sport in the Aegean bronze age. in: P. Christesen and D.G. Kyle. (36-52).
- Scanlon, T.F. (1999) Women, bull sports, cults and initiation in Minoan Crete. *Nikephoros* 12: 33-70.
- Scanlon, T.F. (2009) Contesting ancient Mediterranean sport. *IJHS* 26 (2): 149-160.
- Scanlon, T.F. (ed.) (2014a) *Sport in the Greek and Roman worlds. Volume 1: Early Greece, the Olympics, and contests*. Oxford.

- Scanlon, T.F. (2014b) Women, bull sports, cults, and initiation in Minoan Crete.in: T.F. Scanlon (2014a: 28-59).
- Starke, F. (1995) Ausbildung und Training von Streitwagenpferden. Eine hippologisch orientierte Interpretation des Kikkuli Textes. (Studien zu den Boghazköy-Texten 41), Wiesbaden.
- 高橋幸一 (1992) 古代ギリシア・ローマのスポーツに関する研究動向Ⅰ. ギリシア. スポーツ史研究 5: 37-42.
- 高橋幸一 (1993) 古代ギリシア・ローマのスポーツに関する研究動向Ⅱ. ローマ. スポーツ史研究 6: 41-47.
- 高橋幸一 (1997) クリストフ・ウルフ. 自然民族におけるスポーツ. スポーツ人類学研究 1: 37-53.
- 高橋幸一 (1998) 古代世界におけるスポーツ. スポーツ史研究 11: 1-15.
- 高橋幸一 (1999) F. シュタルケによるキックリ・テキストの馬術論的考察. スポーツ人類学研究 1: 79-88.
- 高橋幸一 (2003) スポーツ学のルーツ—古代ギリシア・ローマのスポーツ思想—. 明和出版.
- 高橋幸一 (2008) オリンピック起源論への歴史学的アプローチ. 体育史研究 25: 53-63.
- 高橋幸一 (2011) 古代世界における女性とスポーツ. 体育学研究 56: 19-30.
- 高橋幸一 (2013a) 青銅器時代のクレタ島における牡牛跳び. 古代世界におけるスポーツの研究動向 1. 未公開.
- 高橋幸一 (2013b) 古代シュメールにおけるスポーツ. 古代世界におけるスポーツの研究動向 2. 未公開.
- 高橋幸一 (2014) 古代ヒッタイトにおけるスポーツ. 古代世界におけるスポーツの研究動向 3. 未公開.
- 高橋幸一 (2015a) 古代ギリシアにおける格闘スポーツの運動技術. 古代世界におけるスポーツの研究動向 4. スポーツ史学会第28回大会特別講演・シンポジウム報告書. スポーツ技術・戦術史の現状と課題. スポーツ史学会第28回大会組織委員会: 4-21.
- 高橋幸一 (2015b) 古代ヒッタイトにおけるスポーツ 2. 古代世界におけるスポーツの研究動向 5. 未公開.
- Thompson, J.G. (1986) The location of Minoan bull sports. A consideration of the problem. JSH 13 (1): 5-13.
- Thompson, J.G. (1989) Clues to the location of Minoan bull-jumping from the palace at Knossos. JSH 16 (1): 62-69.
- Thompson, J.G. (1992) Clues to the location of bull jumping at Zakro. JSH 19 (2): 163-168.
- Ulf, Ch. (²1988) Sport bei den Naturvölkern. in: I. Weiler (14-52).
- Vermaak, P.S. (1993) Šulgi as sportsman in the Sumerian self-laudatory royal hymns. Nikephoros 6: 7-21.
- Weiler, I. (1974) Der Agon im Mythos. Zur Einstellung der Griechen zum Wettkampf (Impulse der Forschung 16). Darmstadt.
- Weiler, I. (²1988) Der Sport bei den Völkern der Alten Welt. 2., durchgesehene Auflage. Darmstadt.
- Weiler, I. (2006) Wider und für das agonale Prinzip - eine griechische Eigenart? Wissenschaftliche Aspekte und Grundstz überlegun gen. Nikephoros 19: 81-110.
- Wiesner, J. (1968) Fahren und Reiten. (Archaeologia Homerica F), Göttingen.
- Younger, J.G. (1976) Bronze age representations of Aegean bull-leaping. AJA 80: 125-137.
- Younger, J.G. (1983) A new look at Aegean bull-leaping. Muse 17: 72-80.
- Younger, J.G. (1995) Bronze age representations of Aegean bull-games. III. in: POLITEIA. Society and state in the Aegean

bronze age. Proceedings of the 5th international Aegean conference, Archäologisches Institut. Heidelberg, 10-13 April 1994.